

LIBRARY NEWS

(図書室だより)

令和6年6月19日 No.3

新座市立第三中学校

校長 石田 和男

図書整理員 名本 浩子

今年は、全国的に梅雨入りの時期が平年より遅く、沖縄、四国と、西からゆっくりとした歩みで、梅雨入りが近づいているようですが、気象庁の予想によると、今週中にはようやく関東も梅雨入りようです。

梅雨といえば、降りしきる雨の音。木々の葉にしずくが打つ音、傘に雨が激しく打ちつける音、地面に落ちる音。みなさんは、雨の音をどう表現しますか。ぽつぽつ、しとしと、ザーザー……。雨の音は音楽のようで、雨粒が音符となって空から降ってくる光景を想像すると、なんだか雨の日が楽しく感じられます。

実は、雨などの「自然音」には、「リラックス」効果があり、その「自然音」が持つ、一定のようで一定ではない、規則的な中に不規則さをあわせ持つ不思議なリズムが、心臓の音などの生体リズムとたがいに呼応しあうため、雨音を聞くと心地よく感じられるのだそうです。また、自然音には、人の耳には聞こえない高周波があり、これによって脳内に^{アルファ}α波が発せられ、気持ちが落ち着くといわれています。

さて、先日、ニュースで、シチズン時計が4月に、全国の20代から50代の働く人、400人(各世代100人)対象に実施した、生活時間に関する調査の結果が報道されていました。

平日の平均睡眠時間や1日のスマホの平均使用時間などの調査の結果のなかでも、注目したのは1週間の読書時間で、1974年、1990年、2024年で比較してみると、「読まない」が全体の半数に近い47.8%と、この50年で読書時間が大きく減少したことがわかりました。

この結果をみて思うことは、大人になると、なかなか本を読む時間を確保することが難しい、だから、学校に行っている期間に、できるだけ本にふれること、本を読むことは貴重な体験になるということです。

勉強の合間やふとした時間に、雨の音に耳を傾けながら本を読んでみてはいかがでしょうか。自然音と本の相乗効果で、気持ちが落ち着くかもしれません。今年度注文した新着図書も、もうすぐ到着予定です。楽しみにしてください！

では、今月のクイズにいきましょう。

夏の雨といえば夕立。雷雨。^{らいう}雷^{かみなり}は夏・冬問わず発生しますが、6月から8月の夏は、特に雷が多く発生する時期です。

そこで、本のタイトルに「雷」が含まれている小説、恩田 陸さんの『蜜蜂と遠雷』からの出題です。ちなみに“遠雷”とは、字のごとく、遠くで鳴る雷のことです。

養蜂家の父とともに各地を転々とし、自宅に自分の楽器を持たない少年。母の突然の死がきっかけで、表舞台から姿を消していた天才少女。出場年齢制限ギリギリの最後のコンクールにかけける楽器店勤務のサラリーマン。名門音楽院在籍の天才少年。

彼ら以外にも数多の天才たちが繰り広げる競争という名の自分との闘い。本選まで勝ち抜き、優勝を手にするのはだれなのか。かなりの長編ですが、彼らの音楽に対する熱い思いにどんどん引き込まれていきます。

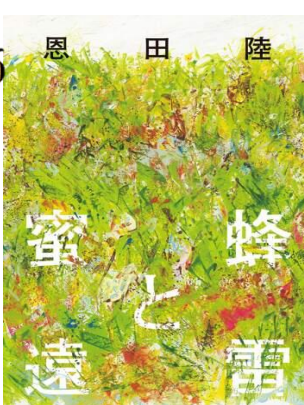
では、問題です。この小説で開催された音楽コンクールとは、何の楽器のコンクールでしょうか。

- ① ピアノ
- ② ヴァイオリン
- ③ チェロ



前号のクイズで、2004年の第1回本屋大賞で、栄えある大賞を受賞した本は② 小川洋子の『博士の愛した数式』でした。① 恩田陸の『夜のピクニック』は、第2回2005年の本屋大賞受賞作です。③ 横山 秀夫の『クライマーズ・ハイ』は、2004年受賞作2位の作品です。

『蜜蜂と遠雷』は、2017年の本屋大賞受賞作です。本屋大賞の本のコーナーにあります。本を読んで、梅雨のうっとりさや日常の嫌なことなどを流し、快適な気分を過ごせるといいですね。



今月号は、新着ではありませんが、本のタイトルに、“雨”にちなんだものが入っている作品を紹介します。

『食堂かたつむり』 小川 糸/著

(ポプラ社)



2010年
劇場公開

バイトから帰ると、恋人も家の中のものもすべて消えていた。ショックで失語症になった倫子は、疎遠だった母のもとに帰り、食堂を始める。「食堂かたつむりの料理を食べると恋や願い事がかなう」前半の、帰郷して新たな一歩を歩みだした話から、後半は、「命をいただく」こと、最後まで心を許せなかった母への思いと後悔、そして母の死後に知る母の愛が一気に押し寄せ、ハンカチ必須です。

『傘をもたない蟻たちは』 加藤シゲアキ/著

(角川書店)

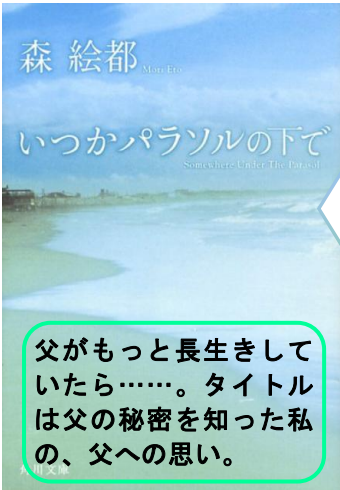


2016年テレビドラマ化。「染色」は、『染、色』として、2021年に舞台上演

腕にスプレーを吹きかける彼女に惹かれていく美大生。書いた原稿が夢で再現される不思議な現象にのめりこんでいく小説家。幼馴染が同性愛者と知り、彼との接し方がわからなくて思い悩む中学生など6編を収録した、各賞でノミネートされる作家、加藤シゲアキ初の短編集集。

『いつかパラソルの下で』

森 絵都/著 (角川書店)



父がもっと長生きしていたら……。タイトルは父の秘密を知った私の、父への思い。

厳格すぎる父への反発から、家を出た兄と私、野々。

その父が突然、事故で死んでしまった。しかも、父は浮気をしていたと知らされる。

父の口癖だった「暗い血」。兄と私、妹の3人の子どもたちは、父の出生の秘密を探る旅に出る。

自分のダメさ加減を父のせいにしてきた。少しだけけれど、嫌いだった父に近づけた私。すっきり心が休まる結末です。

『雨上がり、君が映す空はきっと美しい』 汐見 夏衛/著

(スターツ出版)



表紙のイラストがきれい!

主人公は、容姿に自信がなく、コンプレックスの塊のような高校1年生。その彼女が映画研究部の部長に恋をした。

その先輩から映画の出演や脚本を頼まれる。でも、先輩には彼女がいる。あきらめるしかない。

わたしの人生はここからはじまる。青春ラブストーリー。



『かたつむり』を題材にした絵本

時間がない、長編の小説は苦手という人も これなら大丈夫!



『でんでんむしのかなしみ』

新美南吉/作 かみやしん/絵 (大日本図書株式会社)



「でんでんむしのかなしみ」を含む5編を収録。美しい光景が目につく、心が和む一冊

『狂言えほん かたつむり』

文：内田鱗太郎 絵：かつらこ (ポプラ社)



見たこともないかたつむりを取ってこいと命じられた家来。藪で寝ていた山伏をかたつむりと勘違いして、とんでもない展開に!

「読書の夏」キャンペーンのお知らせ
きたる7月10日(水)～7月18日(木)

1人5冊まで借りられます。借りた人には「スターフックス」のしおりをもれなく贈呈!

あの世界最大手のコーヒーチェーン店も顔負けのおいしいメニューのしおりをご用意しております。

ぜひ、図書室までご来室ください!

